

modular 楕円曲線の Heegner 点

東京工業高等専門学校 中里 肇 (Hajime Nakazato)

E-mail address: nakaz@tokyo-ct.ac.jp

1.

E を \mathbb{Q} 上の modular 楕円曲線とし、 N をその導手とする。非自明な \mathbb{Q} 有理写像 $\varphi: X_0(N) \rightarrow E$ が存在し $\text{cusp } \infty$ を E の 0 に移すとする。

(i) E が虚数乗法を持たないとき、有理素数の集合 S_E を次の様に定義する。

$$S_E := \{p; \text{Gal}(\mathbb{Q}(E_p)/\mathbb{Q}) \not\cong \text{Aut}(E_p)\} \cup \{p; p|N\} \cup \{2, 3\}.$$

Serre の定理[8]Théorème 3 により、 $\text{Gal}(\mathbb{Q}(E_p)/\mathbb{Q}) \cong \text{Aut}(E_p)$ が有限個の素数 p を除き成立するので、 S_E は有限集合である。

(ii) E が虚数乗法を持つとき、 $\mathcal{O} := \text{End}_{\mathbb{Q}}(E)$ と置くと、 $k := \mathcal{O} \otimes \mathbb{Q}$ は虚 2 次体となる。(このような虚 2 次体は 9 個、order は 13 個ある[7]Example p295。) k の判別式を $-d$ とすると、 d は N の約数となる。 E に対して、有理素数の有限集合 S_E を次の様に定義する。

$$S_E := \{p; p|N\} \cup \{2, 3\}.$$

虚 2 次体 $K := \mathbb{Q}(\sqrt{-D})$ を判別式が $-D$ であり、次の 3 条件を満たすとする。

- (1) $\ell|D \Rightarrow \ell \notin S_E$.
- (2) $h_K > \text{deg}(\varphi)$ (h_K は K の類数).
- (3) $\ell|N \Rightarrow \ell$ は K において分解する.

楕円曲線 E に対して、この 3 条件を満たす虚 2 次体 K は無限個存在する。

以後、modular 楕円曲線 E に対して K は上の 3 条件を満たすと仮定する。条件 (3) から、 K の整数環 \mathcal{O}_K の整イデアル \mathfrak{n} で、 $\mathcal{O}_K/\mathfrak{n} \cong \mathbb{Z}/N\mathbb{Z}$ を満たすものが存在する。 K のイデアル \mathfrak{a} に対して、modular 曲線 $X_0(N)$ の moduli 性質で定まる \mathbb{C} 有理点を $x_1 = (\mathbb{C}/\mathfrak{a}, \mathbb{C}/\mathfrak{a}\mathfrak{n}^{-1})$ と定義する[2]。体 K_1 を K の Hilbert 類体とすると、虚数乗法論により、点 x_1 は K_1 有理点となり、 $X_0(N)$ の Heegner 点と呼ばれる。 $E(K_1)$ の点を $y_1 := \varphi(x_1)$ と定義する。点 y_1 を、modular 楕円曲線 E の Heegner 点と呼ぶことにする。

Theorem 1.1. Heegner 点 y_1 の位数は無限大である。

$E(K)$ の点を $y_K := \text{Tr}_{K_1/K}(y_1)$ と定義する。Kolyvagin [4, 5, 6, 3] は、点 y_K の位数が無
限大ならば、Mordell-Weil 群 $E(K)$ の階数は 1 であり、Tate-Shafarevich 群 $\text{III}(E/K)$ は
有限であることを示した。 ρ は複素共役を表す。

Theorem 1.2. もし y_K の位数が有限ならば、 $y_K \in E(\mathbb{Q})$.

Corollary 1.3. もし $y_K^\rho \neq y_K$ ならば、点 y_K の位数は無有限大である。

2.

次の Lemma は、既に知られていることである。

Lemma 2.1. $K(x_1) = K_1$.

Proof. K のイデアル \mathfrak{a} に対して、 \mathbb{C} 上の楕円曲線 \mathbb{C}/\mathfrak{a} は $K(j(\mathfrak{a}))$ 上で定義されたモデル
 E' を持ち、 $\mathcal{O}_K \simeq \text{End}(E')$ である。志村 [9] の Theorem 5.7 (iv) によって、 $K(j(\mathfrak{a})) = K_1$.

modular 曲線 $X_0(N)$ の \mathbb{Q} 上の関数体が $\mathbb{Q}(j(z), j(Nz))$ であることは、よく知られてい
る [9] p157。Gross [2] の I.2. で述べられている様に、 $\mathfrak{a} = \mathbb{Z}\omega_1 + \mathbb{Z}\omega_2$, $\text{Im}(\omega_1/\omega_2) > 0$, $\mathfrak{a}n^{-1} =$
 $\mathbb{Z}\omega_1 + \mathbb{Z}(\omega_2/N) \simeq \mathbb{Z}N\omega_1 + \mathbb{Z}\omega_2$. 従って、 x_1 の座標 $j(\mathfrak{a}) = j(\omega_1/\omega_2)$, $j(\mathfrak{a}n^{-1}) = j(N\omega_1/\omega_2)$
が、 K 上 K_1 を生成する。□

Lemma 2.2. $y_1 \notin E(K)$.

Proof. もし、 $y_1 \in E(K)$ ならば、 $y_1^\sigma = y_1$, $\forall \sigma \in \text{Gal}(K_1/K)$. 写像 φ は \mathbb{Q} 上で定義されて
いて、 $y_1 = \varphi(x_1)$ であるから、 $\varphi(x_1^\sigma) = (\varphi(x_1))^\sigma = y_1^\sigma = y_1$. 従って、 $x_1^\sigma \in \varphi^{-1}(y_1)$,

$$T := \{x_1^\sigma; \sigma \in \text{Gal}(K_1/K)\} \subseteq \varphi^{-1}(y_1).$$

Lemma 2.1 により、 $x_1^\sigma (\sigma \in \text{Gal}(K_1/K))$ は相異なるので、

$$h_K = |T| \leq |\varphi^{-1}(y_1)| \leq \deg(\varphi).$$

これは K の条件 (2) に矛盾する。□

Proof of Theorem 1.1.

Heegner 点 y_1 の位数が有限で、 $\text{ord}(y_1) = m$ であると仮定する。

(i) $\exists l|m$ s.t. $l \notin S_E$ の時:

l を $l|m$, $l \notin S_E$ である素数とする。位数 l の点 $z := (m/l)y_1 \in E(K_1)$ とおく。

$\sigma \in \text{Gal}(\mathbb{Q}(E_l)/\mathbb{Q})$ の $\text{Aut}(\bar{\mathbb{Q}})$ への拡張を $\bar{\sigma}$ で表すことにする。

(a) E が虚数乗法を持たない時;

S_E の定義により、 $l \notin S_E$ から、 $\text{Gal}(\mathbb{Q}(E_\ell)/\mathbb{Q}) \simeq \text{Aut}(E_\ell)$. 従って、 $z^\sigma (\forall \sigma \in \text{Gal}(\mathbb{Q}(E_\ell)/\mathbb{Q}))$ は E_ℓ を生成する。

拡大 K_1/\mathbb{Q} は正規であるから、 $K_1^\sigma = K_1$, $\forall \sigma \in \text{Gal}(\mathbb{Q}(E_\ell)/\mathbb{Q})$. 従って、 $z^\sigma \in E(K_1)^\sigma = E(K_1)$, $\forall \sigma \in \text{Gal}(\mathbb{Q}(E_\ell)/\mathbb{Q})$. 故に、 $E_\ell \subseteq E(K_1)$.

Weil-pairing を使うと、 $\zeta = \exp(2\pi i/l) \in K_1$. ところが、 l の分岐指数を考えると、 $\mathbb{Q}(\zeta)$ においては $l-1 \geq 4$ であるが、 K_1 においては $l \notin S_E$ より、1 または 2 である。これは、矛盾である。

(b) E が虚数乗法を持つ時;

Tate 加群 $T_\ell(E)$ は、 $\mathcal{O}_\ell := \mathcal{O} \otimes \mathbb{Z}_\ell$ 上自由で階数が 1 であり、 $E_\ell = T_\ell(E)/\ell T_\ell(E)$ であるから、 $E_\ell = \mathcal{O}t_1 = (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})t_1 (\exists t_1 \in E_\ell)$. 従って、 $z = \alpha t_1 \exists \alpha \in \mathcal{O} - \ell\mathcal{O}$.

[b-1] l が k で分解しないとき:

l が素元であるから、 $\alpha \notin \ell\mathcal{O}$ より、 $\alpha + \ell\mathcal{O} \in (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})^*$. 従って、 $\mathcal{O}z = (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})z = (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})\alpha t_1 = (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})t_1 = E_\ell$. $\mathcal{O} = \text{End}_{\mathbb{Q}}(E)$ の元は k 上有理的である[9] (5.1.3)p114 から、 $z \in E(K_1)$ より、 $E_\ell = \mathcal{O}z \subseteq E(kK_1)$.

[b-2] l が k で分解するとき:

$\rho \in \text{Aut}(\mathbb{Q})$ を複素共役とする。 \mathcal{O} の類数が 1 であるから、素元 $\pi, \pi^\rho \in \mathcal{O}$ が存在して $l = \pi\pi^\rho$. また、 $\rho^2 = id$, $E_\ell^\rho = E_\ell$ より、 $t_1^\rho = \beta t_1 \exists \beta \in \mathcal{O}$ s.t. $\beta + \ell\mathcal{O} \in (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})^*$ であり、 $\beta^\rho t_1^\rho = t_1$.

もし、 $\alpha \notin \pi\mathcal{O} \cup \pi^\rho\mathcal{O}$ ならば、 $\alpha + \ell\mathcal{O} \in (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})^*$ となり、 $\mathcal{O}z = (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})z = (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})\alpha t_1 = (\mathcal{O}/\ell\mathcal{O})t_1 = E_\ell$.

もし、 $\alpha \in \pi\mathcal{O}$ ならば、 $\alpha t_1 = z \neq 0$ より、 $\alpha \notin \pi^\rho\mathcal{O}$ であるから、 $\alpha^\rho \in \pi^\rho\mathcal{O} - \pi\mathcal{O}$. 従って、 $\alpha\mathcal{O} + \alpha^\rho\mathcal{O} = \gamma\mathcal{O}$, $\exists \gamma \in \mathcal{O} - \pi\mathcal{O} \cup \pi^\rho\mathcal{O}$ であるから、 $\delta\alpha + \varepsilon\alpha^\rho = \gamma$, $\exists \delta, \varepsilon \in \mathcal{O}$. ところが、 $\mathcal{O}z + \mathcal{O}z^\rho \ni \delta z + \varepsilon\beta^\rho z^\rho = \delta\alpha t_1 + \varepsilon\beta^\rho\alpha^\rho t_1^\rho = \delta\alpha t_1 + \varepsilon\alpha^\rho t_1 = \gamma t_1$ であるから、 $E_\ell = \mathcal{O}t_1 = \mathcal{O}\gamma t_1 \subseteq \mathcal{O}z + \mathcal{O}z^\rho \subseteq E_\ell$ となり、 $\mathcal{O}z + \mathcal{O}z^\rho = E_\ell$.

もし、 $\alpha \in \pi^\rho\mathcal{O}$ ならば、 z の代わりに z^ρ を使うと同様な議論で同じ結果となる。

$\mathcal{O} = \text{End}_{\mathbb{Q}}(E)$ の元は k 上有理的であり、 $z \in E(K_1)$ であるから、 $\mathcal{O}z \subseteq E(kK_1)$. $\mathcal{O}^\rho = \mathcal{O}$, $(kK_1)^\rho = kK_1$ から、 $E_\ell = \mathcal{O}z + \mathcal{O}z^\rho \subseteq E(kK_1)$.

総ての場合に、 $E_\ell \subseteq E(kK_1)$.

Weil-pairing を使うと、 $\zeta = \exp(2\pi i/\ell) \in kK_1$. ところが、 ℓ の分岐指数を考えると、 $\mathbb{Q}(\zeta)$ においては $\ell - 1 \geq 4$ であるが、 $d|N$ であるから kK_1 においては $\ell \notin S_E$ より、1 または 2 である。これは、矛盾である。

(ii) $\forall \ell|m \Rightarrow \ell \in S_E$ の時 ($m = 1$ を含む):

$\text{ord}(y_1) = m$ であるから、 $y_1 \in E_m$. $L = \mathbb{Q}(E_m)$ とすると、 $y_1 \in E(L)$.

L/\mathbb{Q} において分岐する素数 ℓ は、 $\ell \in S_E$. K_1/\mathbb{Q} において分岐する素数 ℓ は、 $\ell|D_K$. しかし、 K の条件 (1) により、 $\ell \notin S_E$.

従って、 $L \cap K_1$ は \mathbb{Q} 上不分岐であるから、 $L \cap K_1 = \mathbb{Q}$. (もし、 $m = 1$ ならば $L = \mathbb{Q}$.)

$y_1 \in E(K_1)$ かつ $y_1 \in E(L)$ であるから、 $y_1 \in E(\mathbb{Q})$. これは、Lemma 2.2 に矛盾する。

Proof of Theorem 1.2.

Heegner 点 y_K の位数が有限で、 $\text{ord}(y_K) = m$ であると仮定する。

(i) $\exists \ell|m$ s.t. $\ell \notin S_E$ の時:

Theorem 1.2 の証明と同じ議論で、矛盾がでる。

(ii) $\forall \ell|m \Rightarrow \ell \in S_E$ の時 ($m = 1$ を含む):

Theorem 1.2 の証明と同じ議論で、 $y_K \in E(\mathbb{Q})$.

REFERENCES

1. Gross, B. H., and Zagier, D., *Heegner points and derivatives of L-series*, Invent. math. **84**(1986), pp. 225-320.
2. Gross, B. H., *Heegner points on $X_0(N)$* , in Modular Forms (Rankin, R. A, ed.) Chichester, Ellis Horwood, 1984, pp. 87-106.
3. ———, *Kolyagin's work on modular elliptic curves*, in *L-functions and Arithmetic* (Coates, J. and Taylor, M. J. eds.) Proc. Durham 1989, London Math. Soc. Lecture Note Ser., vol. 153, Cambridge Univ. Press, London and New York, 1991.
4. Kolyvagin, V. A., *Finiteness of $E(\mathbb{Q})$ and $\text{III}(E, \mathbb{Q})$ for a subclass of Weil curves*, Izv. Akad. Nauk SSSR Ser. Mat. **52**(1988), pp. 522-540; English transl., Math USSR-Izv. **32**(1989), pp. 523-542.
5. ———, *On the Mordell-Weil group and the Shafarevich-Tate group of Weil curves*, Izv. Akad. Nauk SSSR Ser. Mat. **52**(1988), pp. 1154-1180; English transl., Math USSR-Izv. **33**(1989), pp. 473-499.
6. ———, *Euler systems*, in The Grothendieck Festschrift, vol. II (A collection of articles written in honor of the 60th Birthday of Alexander Grothendieck), Birkhäuser, Basel, 1991, pp. 435-483.
7. Serre, J.-P., *Complex multiplication* In Algebraic Number Theory, J. W. S. Cassels and A. Fröhlich, eds, Academic Press, 1968, pp. 292-296.

8. ———, *Propriétés galoisiennes des points d'ordre fini des courbes elliptiques* *Inventiones math.* **15**(1972), pp. 259-331.
9. Shimura, G., *Introduction to the Arithmetic Theory of Automorphic Functions*, Princeton Univ. Press, Princeton, 1971.